15分勤務 最初の一歩

ひきこもりの若者雇用「好きな時に来て」

春日井のカフェ

ひきこもりや不登校の若者に働きやすい場を提供しようと、最短で「十五分」勤務しただけで賃金を支払う珍しいカフェが今春、愛知県春日井市にオープンした。内閣府の調査では、ひきこもりの人たちは就労関連の理由でつまずくことが多い。十五分という短さによって、心理的なハードルを下げる効果が期待できるとして、専門家も注目している。（長田真由美）

後片付けをする男性(右)と小栗加奈さん＝愛知県春日井市のワンぽてぃとで

JR勝川駅から徒歩約十分。住宅街の一角にあるカフェ「ワンぽてぃと」で今夏、スタッフの男性(三)が黙々と皿を洗っていた。勤務表はない。好きな時に来て、最短十五分から働ける上、十五分単位で増やせる。賃金は愛知県の最低賃金（時給九百五十五円）に基づき、十五分につき二百三十九円だ。

男性は高校卒業後、正社員として電子部品工場で働いた。だが、先輩社員に仕事を教えてもらえず精神的につらくなり、八カ月で退職。業種を変えてアルバイトもしたが、人間関係に疲れて辞めた。その後、一～二年ほど家に閉じこもっていたという。

「『来てもいい。来なくてもいい』という店の考え方が、気持ちを楽にしてくれた」。就労支援事業所からカフェの紹介を受け、開業当初から週一回、二～三時間ずつ通い始めた。接客は苦手なため、厨房で調理や皿洗いを担当。徐々に勤務を増やし、今は多い時で週三日、四～五時間ずつ働いている。

カフェは、この男性を含む三人を「十五分雇用」の枠で採用し、タイムカードで労働時間を管理する。他に通常のパート従業員が二人おり、うち一人と経営者の小栗加奈さん(四)の計二人が常駐して、十五分雇用の三人が自由に働ける仕組みを整えている。

さらに不登校の中学生四人を「職場体験」として受け入れている。同じく十五分単位で体験でき、時間に応じて図書券と店の割引券を渡す。友達との人間関係に悩み、不登校になった中学三年の女子生徒(一五)は五月から月二～三日、四～五時間ずつ接客に挑戦。「だんだん声をかけられても平気になった。お客さんの『ありがとう』の言葉がうれしい」と話す。

主婦だった小栗さんが店を開くきっかけは、中学三年の三女(一四)の不登校。小学五年の頃から学校を休むようになった。「学校に行かなくてはと思うけど行けない」とうつむく三女を見て、「社会に出るのが難しい若者が、社会に出る前の練習の場をつくろう」と思い立った。クラウドファンディングで集めた約八十五万円で開業し、三女も職場体験をしている。

小栗さんは「もっと高い時給がいい、と別の職場に移ってもらうのも大歓迎。誰かのために働くことが生きがいにつながってくれれば」と願う。問い合わせはカフェのメール＝tomarigi.kasugai@gmail.com＝へ。

短時間 新しい試み

ひきこもり支援に詳しい愛知教育大の川北稔准教授の話

わずか十五分から雇う試みは新しい。ひきこもりの人が職業訓練を経て就職しても、フルタイムが条件だと道のりが長いと感じるだろう。もし途中で辞めると「また失敗した」と悩む恐れもある。十五分単位なら、あまり緊張せずに働ける上、「働くことができた」という自信がつきやすいのではないか。

※内閣府の実態調査（2016年）をもとに作成

「就労」つまずき多く

全国に推計54万人超

内閣府の二〇一六年の調査によると、半年以上自宅に閉じこもっている十五～三十九歳のひきこもりの人は推計五十四万一千人。きっかけは「職場になじめなかった」「就職活動がうまくいかなかった」など、就労に関するつまずきが目立つ。

厚生労働省の委託を受けた相談拠点「地域若者サポートステーション」は全国百七十七カ所にあり、働く意欲を引き出すことから、職場定着までを支援している。最近は、ハローワークも就労に悩む若者の専用窓口を設置している。

福井県越前市の場合、インターネット上の仮想空間「メタバース」を使った、ひきこもりの人の支援を検討中だ。「アバター」と呼ぶ自分の分身キャラクターを登場させ、自由に動かせる。外出が難しく、他人と接するのが苦手でも社会とつながれる可能性がある。担当者は「当事者が行政に何を求めているか本音を聞き、どんな就労支援ができるか検討したい」と話す。